

聖語蔵経卷の魅力

乾 善 彦

はじめに

正倉院といえば、校倉造の正倉とそこに納められた数々の宝物で有名のだが、その正倉の前にもうひとつ棟、同じ校倉造の正方形の蔵がある。もと東大寺尊勝院の経蔵で、聖語蔵とよばれ、明治27年、所蔵の経卷が皇室に献納されたのを機に正倉院の構内に移築されたものである。そこに収められているのは、隋・唐経や天平写経を中心とした貴重な經典ばかりであり、聖語蔵経卷と呼ばれる。毎年、奈良国立博物館で開催される正倉院展には、最後の方にならず、ここの経卷のいくつかが出展される。その聖語蔵経卷が、カラーデジタル化されて、広く研究に資するようになった。



図1 聖語蔵

カラーデジタル版聖語蔵経卷は現在、第一期隋・唐経から第四期甲種写経までが刊行されており、この度、本学図書館に一括収蔵された。これを機に、その研究資料としての一端を紹介しておきたい。

1. 資料の概要

聖語蔵経卷は、第一期 隋・唐経篇 243 卷、第二期 天平十二年御願経 750 卷、第三期 神護景雲二

年御願経 742 卷、第四期 甲種写経 316 卷（現在第一期配本 158 卷）で、現在なお、刊行途中である。第一期の隋・唐経は、隋・唐時代に書写されて遣唐使たちなどによって将来された写経類である。これらの中には、平安時代初期（9世紀）の白点が付されたものが散在するが、その全容はかならずしも明らかではなかった。今回のデジタル化で、その全容を明らかにすることができるようになった。これからの調査が待たれる。第二期の天平十二年御願経は、聖武天皇の皇后光明子が、亡父母への追善のために書写させた一切経であり、世に五月一日経として名高いものである。これらには、書写校正に携わった人々による書きつけがあり、一切経書写に関わる記録として、その成立を考える上で貴重な資料となっている。これもその全体像を画像によって知ることができるようになり、今後、研究史を見直すことができるようになった。第三期の神護景雲二年御願経は称徳天皇の発願によるもので、景雲経と呼ばれならわされてきたが、このデジタル化のために精査された結果、景雲経といえるものは、その奥書を有する四巻のみであり、そのほかは多くが宝亀年間に行われた一切経の書写事業の折のものであることが明らかになった。このように本デジタル版によって、研究史が塗り替えられることが、今後、さまざまな形であらわれてくるに違いない。第四期甲種写経は雑多なものを含むが、中には界線をひかない写経や、新羅写経などが含まれ、その多様性は經典の伝来や仏教の受容にまつわるさまざまな情報を提供してくれる。

2. 訓点資料として

第一期は、隋・唐経といわれる舶載の経卷である。その伝来の確かさに加えて、この中に白点が加点されているものが、従来注目されていた。たとえば、唐経である大乘大集地藏十輪経正暦二年点などである。お経や漢籍を日本語で理解するために、記号や

仮名が書き込まれたものを訓点資料といい、日本語史研究に重要な資料となっている。平安時代中期以降、赤の朱点や黒の墨点がポピュラーになるが、平安時代初期には白墨のようなもので付されることがあり、白点という。平安時代初期という古い点で貴重なのだが、白点は朱や墨と違い剥離しやすいので、残っているものも少なく、開くたびにそこなわれていくので、扱いは慎重を要するし、できるだけ開くのを制限しておく必要がある。そこで、これを常時扱うことはできないでいた。白点資料として、地蔵十輪経や方広経など数点は、写真版がかつて作られたが、それも今は入手しがたく、平安時代初期の訓点研究は、新しい研究者を開拓できないような状態がつづいていた。これで聖語蔵の全体像が明らかになったので、今後、あらたな発見があるにちがいない。たしかに、現物をみるにしくはないが、デジタル版は解析度も高く、細密な研究が期待できるのである。

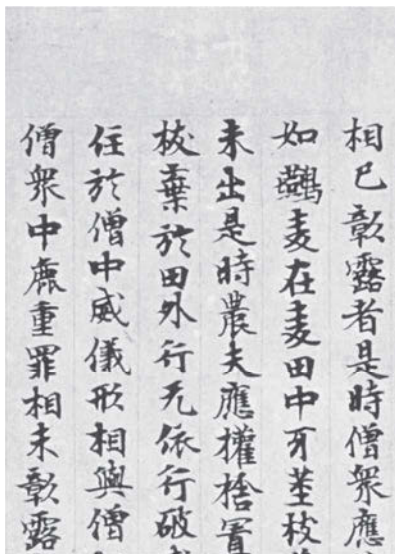


図2 大乘大集地蔵十輪經正暦二年点

平安時代初期の訓点資料は、この時期には和文の資料がない点で、日本語の歴史を研究するうえで極めて重要である。それは上代語と中古語とのあいだをつなぐ資料だからである。近年、上代資料として、七・八世紀木簡が大量に発見されるようになった。そこで上代語の知見が従来と大きく異なってきた。それにともない、中古語への連続と非連続とが注目されるようになった。たとえば、木簡には他の上代資料には例をみないが、平安時代和文には例がみられるものがあり、木簡資料の日常性が平安時代和文

に連続していることがいわれる。ところが、一方で上代散文、古事記や正倉院仮名文書などには漢文訓読的な語法が多く含まれることが指摘されている。とすると、平安時代初期の訓点資料の用語と中後期以降の平安和文との関係が見直される必要が出てきている。そんな目でもう一度、平安時代初期訓点資料を見直す必要がある。このデジタル化は、それが容易にできるようになった点で、とてもありがたいものなのである。

3. 字体資料として

もちろん、隋・唐経本文の漢字字体が、書道史や字体史の研究に資することはいうまでもない。現在、漢字字体史のデータベースとして、北海道大学教授であられた石塚晴通氏を中心として、漢字字体規範データベース (HNG、Hanzi Normative Glyphs) が公開されているが、その中に、聖語蔵経巻から、賢劫経 (隋経)、四分律、阿毘達磨大毘婆沙論 (唐経)、大般若経 (和銅経)、瑜伽師地論、四分律 (五月一日経)、如来示教勝軍王経、大乘悲芬陀利経 (神護景雲経) などが利用されている。膨大な資料の中から厳選されたものであるが、他の経巻の字体も当然参照されるべきであり、それは個人個人の研究に委ねられることになる。われわれはこのデータベースをもとにしながらも、独自の調査が可能になったのである。これについても、一例をあげると、写経用の正字体はけっして当時の正字体ではなくて、どちらかといえば通行字体になる。たとえば、辞書的な正字体「來」に対して、写経類には、現在われわれ

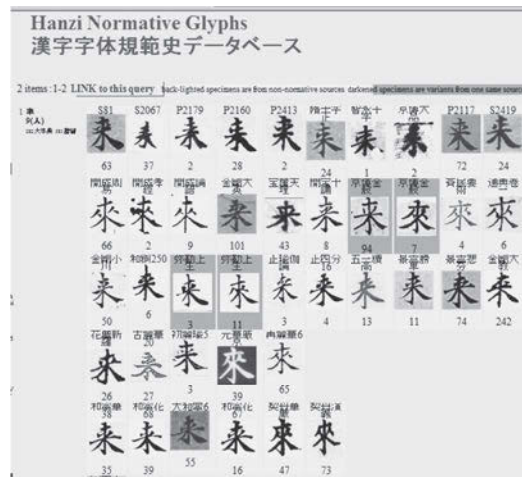


図3 漢字字体規範史データベース
http://www.joao-roiz.jp/HNG12/

が新字体として用いる「来」もまま見られたりする。写経という世界の標準字体も、ものによって一様ではない。また、書風についても、8世紀前半に、それまでの六朝書風から初唐の書風へと変化する様子が見て取れる。しかしこれには個人差もあるのであり、そのあたりの厳密な区分けも、全体がデジタル化されることによって、その全体的な研究が可能になったのである。

その点で、前にもふれたが、神護景雲二年とされてきたものの大半が、景雲経でないことが明らかになったことの意義は大きい。今後、このような研究が陸続とあらわれ、従来必ずしも明らかではなかった無奥書の経巻類の基礎的研究が積み重ねられることで、資料としての価値が見直され、字体や書風の史的 research が大きく進むと思われる。

4. 裏文書

甲種経巻類には、もうひとつ、経典以外の資料としての魅力もある。梵網経疏抄には、裏書きとして

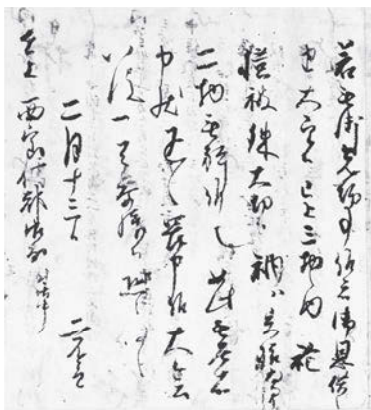


図4-1 梵網経疏抄裏文書（漢字文書）



図4-2 梵網経疏抄裏文書（仮名文書）

鎌倉時代、承久・貞応ごろの文書が残されている。梵網経疏抄は経典の注釈であり、経典のように、料紙が用意され、写経され、校正されといった工程を踏むものではなく、書式も自由であれば書写態度も、写経とは大きく異なる。そのような自由な筆致も魅力なのだが、手紙や記録といった文書を二次利用してその裏に書かれたものであり、元来の表面（裏文書という）に書かれているものも、同時代の資料として価値が高い。鎌倉時代の文書を集成した『鎌倉遺文』に未収録の文書が多数あり、これらを利用できるようになったことは、たいへん喜ばしい。正倉院展などでは決して、裏全体を見ることはないが、本デジタル化では文字のかけらでもあればすべて撮影する方針であり、裏文書も表面同様、全体像を見ることができるのは、今後の研究に資すること大であらう。とくに、そこに多く含まれる仮名文書は、ほとんどが『鎌倉遺文』に未収録の文書、つまり今まで報告されていなかった文書類であり、鎌倉時代語の研究にとっても、利用価値の高いものとなっている。甲種写経類は、新たな発見の宝庫であるといえよう。甲種写経類の続刊、乙種写経類の刊行が待たれる。

おわりに

以上、話が抽象的に過ぎたきらいがあるが、今回、デジタル化された聖語藏経巻は、質・量ともに、国語学・国語史資料としての価値のきわめて高いものである。もちろん、仏教史、書道史、古代史といった、本来、主たる資料として研究がなされてきた分野においても、当然、喜ばれるべき事業であったが、国語史をはじめ、美術史や中世史といった周辺の研究においても利用価値の高いものなのである。本学の多くの研究者や学生に利用されて、その真価をいかんなく発揮できることを、願ってやまない。小生もこれを活用して、自身の研究が大きく進展するものと期待している。

(いぬい よしひこ 文学部教授)